



怒る女

あんず

怒る女

<http://p.booklog.jp/book/33345>

著者：あんず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kojiro-sasa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33345>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33345>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

「信じられない！」

理子は鼻の穴をふくらませて、有紀の方に身を乗り出した。

喫茶店という場所柄、周りも連れと話をしている賑やかではあるが、それでも理子の声が浮いているのではないかと気が気でない有紀の心配をよそに、怒りはエスカレートしていった。

清楚な美しい顔立ちに、上品な服装。パッと見は良いところのお嬢様風で、この風貌から勝手に勘違いした男性達は目をハートにしながらか彼女に近寄ってくる。

今だって、通り過ぎる男性の三人に一人が理子のことをチラチラと見ていた。

「ねえ、有紀もそう思わない！？」

「まあ、ねえ」

有紀はあいまいに返事をした。

どうせすぐにまた別のことに怒り始めるのだ。本気になって『そうそう』と相手をするのも疲れる。

学生の頃から怒りっぽかったが、最近は度を越えている。

それでも十代ならば若さを理由にできるが、二十五にもなってこれじゃあ先が思いやられるな、などと考えていたら、理子の声が急にトーンダウンした。

「どうしたの？」

お腹の具合でも悪くなったのではと心配していると、口に手を当てて小声で「しっ、ちょっと黙ってて」と制止された。

「トイレ、行って来てもいいよ」

「はあ？何言ってるのよ」

漫画で表すとしたら、間違いなく理子のこめかみ辺りには大きな怒りマークが張り付いていることだろう。だが、そんな態度とは裏腹に、声の音量はとても小さかった。

「窓際の一番端に座っている人、見える？」

「ああ、うん。スーツの人だよ」

「同じ会社の人なんだ・・・」

「へえー。でも何でそんなコソコソしてるのよ。あなたらしくもない」

しばしの沈黙の後、答える代わりに少し頬を赤らめながら何やらモジモジし始めた。

「なるほどね。そういうことか」

一日に一度はドッカーンと噴火している理子だが、やはり年頃の女の子である。

思いを寄せているのは、少し気の弱そうな眼鏡の男性だった。

「あれえ？何の話をしていたんだっけ」

すっかりキバを抜かれたライオンのような理子は、夢見る乙女のような表情でチラチラと男性を見ている。

有紀は不遇な学生時代を、ふと思い出した。

好きになった人は皆、親友でいつも一緒だった理子の方を好きになった。

ある時など、必死の思いで告白した相手から、少しの迷いも無く『ごめんなさい』と言われた直後に、「君の友達を紹介してくれ」などと言った失礼極まりない男性もいた。

確かに有紀は理子ほど美人ではない。というか見た目は十人並みで、その他大勢に入る部類だ。

しかし、性格は穏やかで従順。率先して誰かの悪口を言うこともないし、理子のように、ささいなことで怒ることもない。

だが世の男性達は所詮見た目重視なのだということを、二十五年生きてきて嫌と言うほど思い知らされた。否定する者も居るだろうが、そんな建前に惑わされずに生きて行った方が、自分の精神衛生上にもすこぶる良いのである。

「でも、意外」

「何が？」

「いつも、あれだけ堂々としているんだもの。声を掛けたらいいじゃない」

すると理子が鋭い目でキッとにらみつけた。

「それとこれとは別！」

結局、彼が静かにコーヒーを飲む姿を、うっとりとした表情で三十分見つめ続けた。

会計を済ませて立ち去る後姿を見送る顔は、すっかり夢の世界の住人だった。

「大丈夫。きっと向こうから告白してくれるよ」

そう言って、有紀は残りのジュースを一気に飲み干した。

「いい加減なこと言わないでよ」

否定する理子の顔は、まんざらでもないといった様子だった。

幸福

金曜日の夜、有紀は美白パックをしながら携帯をいじっていた。

掛かって来るはずの電話がまだ来ない。

（もしかして、忘れられてるのかしら）

不安になって手に取った瞬間、携帯が鳴った。

「もしもし」

努めて冷静に振舞っているつもりだが、ほんの少しだけ声が震えてしまう。

相手は会社の先輩で、入社式の時に一目見たときから密かに思いを寄せていた。気さくで人当たりのいい彼は女子社員からの人気も高く苦戦したが、ようやく友人としてデートができる位までステップアップできたのだ。

「明日、予定通りで大丈夫かな」

地味で連れて歩いて誰も羨ましがられないだろう有紀に対しても、彼はすこぶる優しかった。

「うん、大丈夫。明日が待ち遠しいな」

言っても引かれない範囲の言葉を選びながら、精一杯の気持ちをアピールした。

「俺もすごく楽しみだよ。今晚、眠れなそう」

彼は優しく笑った。その声を聞いてますます有紀の胸は高鳴り、翌日への期待が膨らんでいった。

電話を切った後も、しばらくは放心状態で余韻に浸っていたが、ふと、ある不安が脳裏をよぎった。

彼と行く予定の映画館の近くは、理子の出没スポットである。それに加え、なぜだか有紀の大事な日には必ず遭遇するのである。

理子はさっぱりした性格なので、もちろん二人の邪魔をしたりはしないだろう。心配なのは彼の方だった。美しい理子に心を奪われたりしないか。まだ内面をよく見てもらうというほどには親しくないのに、心底不安になる。

せっかくのデートなのだから、余計なことまで考えずに楽しみたいという気持ちと、あまり彼に期待しすぎない方が良く気持ちにブレーキを掛けている部分もあり、乙女心は複雑に揺れ動いていた。

（とにかく今は彼を信じるしかないわね）

起きてもない事態を杞憂しつつ、着ていく予定のワンピースを窓際にかけてた。

彼の好みを念入りにリサーチした結果、かわいらしい系が好みだと知り愕然としたが、清水の舞台から飛び降りる思いで、それは可憐な可愛いワンピースを購入した。

とにかく、明日に賭けているのだ。

「きっと大丈夫よ」

いくら何でも友達の恋路を邪魔するヤボな真似はしないだろうし、心配しすぎて眼の下にクマでも作っていったら、それこそ幻滅されてしまう。あまり余計なことを考えずに、その日はゆっくり眠ることにした。

ようやく嫌なイメージから解放され、ゆったりとした気持ちでベットに横になると、また携帯が鳴った。

「彼・・・、じゃないみたいね」

音で分かる。彼のは特別仕様にしてあるので、どこにいても反応できる自信がある。これは、友人カテゴリーの中の誰かからである。

面倒くさそうに手に取ると、理子からだった。

「もしもし」

何と言う、バッドタイミング。

嫌なイメージをようやく払拭できた所に上塗りされたら、今夜は本当に眠れそうにない。

そんなモヤモヤした気分を無視して、理子は一方的に話し始めた。

「この間の彼と、とうとうデートすることになったの！」

珍しく喜びに満ちた声であった。

「そう、よかったね」

気のない返事をすると、理子はつまらなそうにうなった。

「どうしたのよ。いつもと違うじゃないの」

「別に。もう寝るところだったから」

不機嫌な理由は伏せて、早々に電話を切り上げようとした。

「そう。じゃあ、また連絡するね」

友好的でない振舞いにも、いつものように怒る事はなく、実にさっぱりとした対応である。（やはり恋の力は偉大だわ）と感心しつつ、その日は眠りについた。

遭遇

当日、有紀は待ち合わせの時間より1時間早く到着した。

「まだ・・・、来てないみたいね」

当たり前である。

彼、大沢は、男女問わず人気がある。有紀が思いを寄せていることにも気づいているはずだが、大沢からアプローチをしてくることはなかった。つまり、有紀が思うほど相手は思ってくれていない可能性が濃厚なのである。

デート自体も3年ぶりという有紀が、待っている時間というものを楽しみつつ周りの風景を眺めていると、遠くから見慣れた人物がこちらの方に歩いてきた。

「げっ、理子じゃん」

表情を硬直させ、急いで背中を向けた。

だが、よくよく思い出してみると隣に誰か居たような気がして、おそろおそろ振り返ってみると、例の彼が一緒だった。

「なーんだ。向こうもデートか」

一瞬認識できなかつたのは、彼の影があまりにも薄いせいだった。

理子は美人で頭も良いのに、何故だか男性の好みがよくない。だから、有紀をふったイケメン達が理子に言い寄ったところで、決して付き合ったりはしなかった。

すぐ目の前まで来て、ようやく気付いた理子が「あら」とよそ行きの声を出した。

「こんにちは」

とりあえず、【ちゃんと視界に入ってますよ】という意味合いも込めて、影男君に挨拶をした。

本当の名前が分からないので咄嗟に心の中で決めた名前がぴったり過ぎて、思わずふき出しそうになった。

「どうも」

影男君は人の良さそうな笑顔を見せ、ぺこりと頭を下げた。

なるほど、この人なら癒される。ひと癖ある人ばかり好きになると定評のある理子なのだから、これは大金星である。

「優しそうな人ね」

こっそり言うと、「そうなの」とモジモジしながら理子は照れ笑いを浮かべた。

いつも怒って真っ赤な顔ばかり見ているから、ピンク色の頬をした理子は新鮮だった。これなら、いつも恋していて欲しいものだと思ったりもしながら、二人と別れた。

大沢が来たのは、約束の時間ちょうどだった。

気合いが入っていない感じで少しがっかりしたが、今日の目的は内面をよく見てもらって、あわよくば好意をもってもらうことである。

気を取り直した有紀は、精一杯の笑顔を彼に向けた。

爽やかな秋晴れの中、心配ごともなくなった有紀は（今日は良いこと、ありそう）と清々しい気持ちで歩き出した。

発覚

「は一。もう秋も終わりね」

さきほどからため息が止まらない有紀は、熱いコーヒーを一口だけ飲み、顔をしかめた。

「苦っ」

大の甘党で砂糖は必須なのだが、今日は他のことに気を取られていて、すっかり忘れてしまっていた。

デートから2ヶ月。交際は怖い位順調である。では何の心配が？と思われるだろうが、あれ程頻繁であった理子からの連絡が、あの日以来パタッと途絶えたのである。

「どうしちゃったんだろう・・・」

普段は気が強くて怒ってばかりの彼女に辟易とすることも多いのだが、ここまであからさまに連絡が減るとなると、例のことを考えなくてはならない。

実は理子は、マズいパターンの恋愛に陥ると誰とも連絡を取らなくなり、メールさえ返さなくなる。この2ヶ月の間、何度も電話を掛け、メールを送ったが、全く反応がない。ということは、かなりのどつぼにはまっているのは間違いない。

「んもう、心配してるんだからね」

携帯に向かって愚痴を言うと、ディスプレイに久々の名前が表示された。

「もしもし」

急いで出ると、思いのほか元気な声が聞こえてきた。

「んもう、どうしちゃったのよ」

「うん、ゴメンね。レスできなくて」

「ううん。それより彼と何かあったんでしょう」

そう切り出すと、急に思いつめた声に変わった。

「今から会える？」

いつもの強気な理子からは想像もできないほど、弱々しかった。

急いで会計を済ませて指定された本屋に向かうと、店の一番奥の専門書コーナーでひっそりと立っていた。帽子を目深にかぶりうつむき加減の理子は、有紀に気付いて手を振った。

その瞬間、帽子を目深にかぶっていた理由を悟った。

左目は大きく腫れ上がり、ほとんど開いていない状態で、白い首にも無数のアザができていた。

「どうして・・・」

絶句すると、理子は力なく笑った。

「私の顔、お岩さんみたいでしょ」

「こんな時に冗談言わないでよ」

こんなことになるのなら、いつもの怒りっぽい理子の方が何倍もマシだ。

「彼からやられたのね」

理子はコクンと頷いた。

人柄だけは良さそうだと思っていた影男が、まさかDV男だったなんて夢にも思わなかった。

あの日から理子はずっと軟禁状態で、彼の監視されていた。自宅に戻ることも許されず、職場も一緒に逃げ出す機会は無かった。

「彼ね、殴った後泣きながら謝るのよ」

泣いて許されるなら、警察はいらない。大金星どころか不良債権だったことが分かり、理子の男運のなさに有紀まで悲しくなった。

「今日はどうして出られたの？」

「上司に誘われて、どうしても行かなきゃならなくなったみたいで。それで今しかないって」

「もう戻っちゃ駄目よ。家においで」

信じられないことに、理子は迷っていた。この2ヶ月で、すっかり洗脳されてしまったのだ。

「駄目よ、駄目！そのうち殺されちゃうよ」

「でも優しい時もあるのよ」

優柔不断な態度にイライラして思わず声を荒げた。

「DVを受けた人は、みんなそう言うんだよ。私が同じことをされたら、どう思う？」

そこまで言うと、ハッとした表情で有紀を見つめた。

「理子なら怒りまくって、引き離してくれるよね。私も同じだよ」

二人は一緒に有紀の部屋に戻り、コンビニの弁当を食べた。

「おいしい」

なんでもない弁当を食べながら、理子は微笑んだ。

その日の理子が、多分知り合ってから一番穏やかだった。

憑き物が落ちたように彼の話は一切触れず、自分から携帯の電源も切っていた。

有紀は「さて、これからどうしよう」と傷だらけの理子を見ながら、考えあぐねていた。

偽り

翌日から理子は体調不良を理由に会社を休んだ。

有紀の住むマンションはオートロック式である。万が一彼が来ても応答しなければ安全だが、気の迷いが出て開けてしまったら、それこそ大変なことになる。

悩みぬいた挙句、大沢に相談することにした。

「そうか。それは大変だね」

心底同情したように、大沢は言った。

「ああいう人って粘着質の人が多から、居場所を突き止められるのも時間の問題だと思うの。その前に何とかしないと・・・」

しばらく黙って考え込んでいた大沢が、「そうか」と手をポンと叩いた。

「いい案があるの？」

「俺がその子の彼氏役をやって、わざと見せつけて諦めさせるのはどうかな」

「えっ?!」

有紀の心臓はドキンとなり、頭から冷や水をかけられたような感覚に陥った。

「でもー」

ためらっていると、「俺なら大丈夫だから」などととんちんかんなことを言う。

(違うよ、バカ!)

喉の奥まで出掛かった言葉を必死でのみこんだ。

こんな状況で自分の心配をしているのがバレたら、身勝手な女だと呆れるに違いない。

理子だって、こんなイケメンを好きになるはずがないのだ。彼さえ心を奪われなければ大丈夫。

たった2ヶ月だけど、一緒に時間を過ごしてきた彼を信じてみよう。2～3分の間に思考はジェットコースターのようめぐり、結局大沢の申し出を受け入れることにした。

次の日、理子は病院で診断書をもらい、大沢と共に会社に向かった。

ドアを開けて中に入ると、すぐそばの席に影男は座っていた。眉一つ動かさずに二人と上司の話に聞き耳を立てていたが、自分の所業はバラされないことを悟るとホッとしたようにパソコンをカタカタと鳴らし始めた。

「それでは、申し訳ありませんが、よろしくお願ひします」

理子が立ち上がって深々と頭を下げるまで、影男が理子の方を見ることはなかった。ただ一度だけ表情を変えたのは、大沢が婚約者として挨拶をした時だった。

内心後ろ髪をひかれるような思いでドアを開けた瞬間、影男は大きな声で恰幅のいい中年の男に言った。

「戸部さん、この間のお見合いの話、お受けしようと思うんですが」

理子は泣きそうな顔でドアを閉め、逃げるように会社をあとにした。

大沢は黙って、理子の後を歩いた。

「どうだった？」

いつもの喫茶店で待ち合わせていた有紀は、無事に戻ってきた二人を見て安堵の溜息をついた。

「うーん、微妙」

「えっ、まだしつこくされそうなの？」

「彼、お見合いするんだって」

「良かったじゃない・・・」

未だに未練タラタラの理子に呆れつつ、これで一安心だと胸を撫で下ろして大沢の方にふと目を遣った。

(あれ?)

明らかに、理子を見る眼差しの質が変わっている。

演技はもう終わったというのに。

(どうしよう・・・)

不安そうな有紀のことなど目に入らない様子で、ひたすら理子を見つめ続けていた。

予感

あれから、めっきり大沢からの連絡が減った。有紀の方から連絡しても繋がらず、メールの返信は1日遅れでやっと返って来る有り様だった。

原因は何となく分かっている。理子に恋してしまったのだろう。

普段の怒ってばかりの理子なら、事態は違っていたように思う。でも今は、弱っているせいかわげで、関わる人全てが守ってあげたくなってしまうのではないかと思われる雰囲気醸し出していた。

「また、このパターンかあ」

誰にぶついたらいいのか分からない怒りが、沸々と沸いてくる。

冷静に考えて、理子は悪くない。大沢だって、自分の気持ちに正直で不器用なだけなのだ。

とにかく、この宙ぶらりんの状態がたまらなく嫌で、逃げ出したかった。

覚悟を決めて携帯を手にとると、思いつめた表情で電話を掛けた。

コール音が鳴っているが、なかなか出ない。1・・・、2・・・、3・・・。10コール目でようやく繋がった。

「もしもし」

少し緊張した声で言うと、理子も静かに応答した。

「私も電話しようと思っていたところなんだ」

言い辛そうに、言葉を選びながらゆっくりと話した。

「大丈夫だよ。分かっているから。こんな事位で駄目になるなら、元々駄目だったんだと思う」

「でも一時の気の迷いだわ。だって有紀のことも大切なんだって言っていたもの」

二人は少しの間沈黙した。理子が元気なら言える事も、今は言えない。それに、八つ当たりのようなことをして友情を失うのは怖かった。そしてそれは、理子の方も同じだった。有紀を気遣うあまり、いつものような歯切れの良さはなかった。

「もういいよ。ここ数日、覚悟してたの。だから付き合ってもいいよ」

「付き合わないよ！今は誰とも付き合う気にはなれない・・・」

こういう時、相手が理子で良かったと、つくづく思う。その場を取り繕うための嘘をつかないからだ。

理子との電話を切った後、すぐに大沢にメールを送った。

良い思い出ももらったのだから、最後は恨み言を言わずにスッキリとサヨナラをしようと思った。

『今までありがとう。さようなら』

それだけの文章だが、気持ちを全部詰め込んだ。

「笑っちゃうよなあ」

同じ会社の大沢に、『サヨナラ』というもおかしな話である。早速明日には顔を合わせてしまうだろうし、今後会社を辞めない限りは毎日顔を合わせることになる。

だが、今後気持ちを引きずらないための儀式のようなものだ。恋人としての大沢にサヨナラをしたのである。

どうせ返事は返ってこないだろうと思っていたが、以外にもすぐに携帯が鳴った。

大沢の返事も、実にシンプルだった。言い訳など一切ない。でも、それで良い。

「ごめん」

今までもらった中で一番短いメールで、二人の関係はアッサリと終了したのである。

夕焼け

街行く人が、手をすり合わせて肩を縮めながら通り過ぎていく。

並木道は葉が落ち、すっかり冬の装いになっていた。

あれから2ヶ月が経ち、クリスマスも間近だというのに、未だ新しい恋が訪れる予感はない。

「はあー」

深い溜息をつく、理子が「ちょっとー」と眉間に皺を寄せた。

「溜息ばかりつくと運が下がるのよ」

「はい、はい・・・」

そう言われても止まらないものは止まらない。

その原因の一つが、先ほどから目に端にチラチラ映る。これがまた相当なストレスになっていた。

「いつまで、ああしているつもりだろう」

「さあ」

理子の返事は、じつに素っ気無い。

「私には関係ないことだもの」

「でもさあ」

ここまで想われたら、普通なら少しは心が揺らぐだろうに。理子にとっては心底迷惑なことのようで、鬼のような形相で相手をにらみつけた。

だが相手もかなりのツワモノで、目が合っただけで頬を赤らめて小さく手を振っている。

「キモいっ！」

理子は、怒って足をダンッと鳴らした。

正直なところ、有紀もかなり呆れていた。

有紀が振られたことは、まあ仕方が無い。だが心の傷も癒えぬ中、毎日のように恋愛相談まがいの電話を掛けてくる元彼が、どこの世界にいるというのか。ましてその相手が元彼女の親友だなんて。

男らしいと感じたのも見掛け倒しで、ウダウダと同じ話を繰返しては女々しく「俺なんて」を連呼していた。

「もう、付き合ったらん」

やんわりと距離を置こうとしたが、スッポンのようになんか追いかけてくる。

(付き合っている時に、それくらい熱心に追いかけてこい)

心の中で毒をはきつつ、同じ職場ということもあり、仕方なく相手をしていた。

「私たちが帰るまで居るつもりだよ、アイツ」

チラリと目を遣ると、それに気付いた大沢が含みを持たせた笑顔で何か合図をしていた。

格好つけているつもりだろうが、全般的な外れで笑えてくる。

別れた当初は相当落ち込んだが、皮肉なことに大沢という人物を深く知るたびに、こんな男とは早く別れて良かったと思わせてくれた。その点は感謝している。

しばらく無視していると、今度は大沢が手や表情で何かを伝えようとしていた。

「なにになに？理子が照れてるって？」

有紀が言うのと同時に、無言で立ち上がった理子はゆっくりと大沢のテーブルまで近づいて行き、グラスに入った水を頭からかけた。

大沢は慌てた様子で濡れた頭やスーツを拭いていた。

理子は何事もなかったかのように席に戻り、ゆっくりと紅茶を口に運んだ。

「強いなー」

「当然でしょ？」

まだ怒りが醒めないのか、頬が紅潮していた。

理子には、やっぱり怒りが似合う。

恋をして、ピンクになったり青くなったりしたけれど、今が一番理子らしいと思った。

また恋をして傷つくこともあるだろう。それでも今度は、理子が自然のままに怒れる相手であるようにと秘かに願っ

ていた。